

（若狭湾岸の古墳時代）

古墳時代の若狭・敦賀地方

概要

古墳時代（約 250～552 年）には、大和朝廷が現在の奈良県や大阪府で権力を握り、遠く離れた地域を支配する氏族への影響力を徐々に拡大しました。この時代の名前は、天皇や一族の指導者、その他の有力者など、支配階級の人のために建設された大規模な古墳（古墳）に由来しています。古墳は、墓としてだけでなく、権力や政治的地位を示すものとしても機能しました。故人の遺体は、大抵は石の埋葬室に入れられ、それを覆うように土の塚が築かれました。故人には、武器や馬具、農具やその他の道具、装飾品、そして祭器などの副葬品が添えられました。日本列島の各地に築かれた前方後円墳は、大和朝廷の権力の象徴と考えられています。若狭・敦賀地方でも、多くの古墳が築かれており、5 世紀半ばから 6 世紀半ばにかけて築かれた古墳の発掘調査や分析から、この地域が大和朝廷と朝鮮半島の古代王国との関係において重要な役割を果たしたことが示唆されています。

もっと詳しく知る

古墳文化と大和朝廷とのつながり

ほとんどの古墳は、前方後円墳、前方後方墳、円墳、または方墳でした。古墳の形や大きさは、大和朝廷によって確立された政治的および社会的階層を反映していると考えられています。若狭・敦賀地方では約 20 基の前方後円墳と数基の大型円墳の存在が確認されています。これらは、大和との関係が深い、あるいは強いつながりを持つ有力な氏族の長の墓であったと考えられています。5 世紀半ばから 6 世紀前半にかけて若狭に築かれた古墳には、最初に九州で出現した横穴式石室の採用や、朝鮮半島からもたらされた副葬品の使用が見られます。これは、若狭の氏族が、北九州や朝鮮半島の人々と深いつながりを持っていたことを反映しており、大和朝廷と朝鮮の古代王朝との外交に関わっていたことを示しているのかもしれません。

若狭地域で最大の古墳

若狭・敦賀地域で特に大きな古墳の多くは、小浜市と若狭町の間にある北川流域にあります。この地域で、若狭の氏族の長のために造られた 7 つの最大の古墳は前方後円墳で、全長は 63 メートルから 100 メートルでした。最も大きな古墳は上之塚古墳^{じょうのづか}で、5 世紀初頭に造られました。この地域の強力な氏族長のための最後の大規模な古墳は丸山塚古墳^{まるやまづか}で、6 世紀半ばに造られた直径約 50m の円墳でした（しかし、現存はしていません）。これらの大規模古墳の多くは、2 層または 3 層の墳丘で、埴輪^{はにわ}と呼ばれる土製品によって区切られ、堀に囲まれており、また墳丘の斜面は石で覆われていました。このような特徴は、大和の支配者とその一族の古墳の様式を採用したことによ

るものです。

副葬品

他の地域の古墳と同様に、若狭の古墳からも副葬品が出土しており、鏡や青銅の装飾品、宝飾品、刀やその他の武器、馬具、農工具、そして土器などが含まれていました。例えば、若狭中心部にある 5 世紀後半の氏族長の墓である西塚古墳からは、金の耳飾り、銅鏡、金銅の帯具、銀の鈴などが発見されており、その中には朝鮮半島製のものもありました。これらの価値の高い品物（特に帯飾り）は、地位と権力の象徴であり、西塚古墳の埋葬者が大和朝廷と朝鮮半島の王国との関係において重要な役割を果たした重要な人物であったことを示唆しています。

須恵器

4 世紀初頭、土師器^{はじ}と呼ばれる素焼きの赤褐色の陶器が日本で開発されました。土師器は弥生時代（紀元前 400 年～紀元 300 年）のように手で成形され、700～800℃で焼成されました。しかし、5 世紀前半に朝鮮半島から、ロクロで成形し、丘の斜面の中に造られた「穴」の窯で 1000℃で焼成するという新しい陶器の製造技術が輸入されました。これにより、須恵器^{すえ}と呼ばれる、耐久性が高く、浸透性が低い、灰色の陶器が生み出されました。5 世紀半ばには、古墳の外側で祭祀に使われた物に須恵器が含まれるようになり、6 世紀初頭には多量の須恵器^{すえ}が少量の土師器^{はじ}とともに副葬品としてよく使われました。

展示品

展示されている大量の副葬品は、若狭の美浜地域で 6 世紀初頭に地元の指導者のために造られた 34 メートルの前方後円墳である獅子塚古墳から発見されました。その中にはたくさんの種類の須恵器^{すえ}が含まれ、背の高い装飾的な壺、壺をのせる台、脚付きの盆とその蓋、管を刺すための穴がある飲み物を注ぐ壺、そして須恵器^{すえ}の中でも特に珍しい例である角形の飲用の器などがありました。獅子塚古墳用の土器を作っていた窯の跡が、近くの山腹で発見されました。その他の副葬品には、長刀、鹿角の柄のナイフ、鉄製の鏃などの武器、馬具の一部、湾曲した鎌、斧、トングなどの鉄製の農工具があります。展示されている装飾品は、石室から出土した丸い玉や管玉、コンマの形をした勾玉^{まがたま}を組み合わせたものです。この玉は元々、いくつかのネックレスのパーツでした。大きな円筒型の埴輪^{はにわ}は、5 世紀前半に築造された若狭の族長の墓である城山古墳^{しろやま}から出土した破片から復元されました。

古墳の断面の模型は、5 世紀半ば頃に造られた前方後円墳^{むかいやま}の向山古墳 1 号です。発掘調査によって、九州北部で用いられた古い埋葬形式と同じ横穴式石室が発見され、若狭は本州で最初にこのような型の石室構造を採用した地域の 1 つであることが判明しました。古墳の前方部には武器

を収めた長方形の穴があり、石室に埋葬された人物は傑出した戦士であったことが示唆されています。副葬品の中には、朝鮮半島からの金のイヤリングがあり、若狭と朝鮮の旧王国との間にはすでにつながりがあったことを示しています。